

連載⁹⁶

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

グローバル時代に、 日本に歩んでほしい道②「教育」

これは、詰まるところ教育の成果だろうか、決して日本の教育が失敗しているとは言えない。
ところが、際立って不得手なことがある。

第一に、英語が使えないこと、第二に、冒険心がなく、積極的にチャレンジしないこと、そして第三に、お人好しで、人に騙され、カモになりやすいという欠点である。

第一の語学力は、長年指摘されてきたことであり、昨今は小学校でも英語教育が行われているというから、そのうち解決するだろう。第三の超お人好しも、痛い経験を何度かすれば自ずと「人が悪くなる」だろう。

問題は、第二の欠点であるチャレンジができないという面である。これは、ちよつとした経験などで得られる能力ではない。

このチャレンジできない傾向は、国際社会に限らず、日本中、至るところで表れている現象だと思ふ。若者は決して満足していない現状にも甘んじ、官僚や経営者は現状維持を旨として改革を厭い、従業員は上司の機嫌取りと横並びに腐心することが処世術だと考える。諸外国の活気ある様子を見てきた目には、まったく異様に映るのである。

求められた優等生

日本人は、もともとリスクが取れない人間ではない。最近の研究成果では、日本人の80%のDNAは弥生期に大陸から新天地を求めて渡来した人たちのものであるという。かつては倭寇と呼ばれて東南アジア一帯で恐れられ、また、戦国時代は、足軽から大将まで命を張って生き抜いた。これらは決して上からの強制ではなく、自主的にチャンスを求めて行われたことである。近年は戦中の異常心理とはいえ、連合軍に無手勝流で戦った例もある。日本人は、むしろ無謀と言えるほどにリスクを取ることができるDNAの持ち主なのである。しかるに何故に、現状維持、横並びの消極的人間になってしまったのだろうか。それは、社会構造と教育の結果だと言わざるを得ない。

明治維新後、西欧列強を見習い、富国強兵の国策を遂行して大成功した。それは、極度の中央集権体制の樹立と、批判的に考えることをせずに指示に従える能力のある人材を大量に育てることで、国力を集中させたからではないだろうか。西欧に追い付くという単純

日本人の一大欠点

昨今、教育の疲弊が叫ばれている。学級崩壊、受験戦争と塾通い、大学のレベル低下、私学の経営難、そして何よりも産業界が望む独創的な発想ができる人材が育っていないという不満である。しかし、本当に日本の教育はダメになっているのだろうか。

筆者は、国際機関の長として世界各国を相手に外国人と一緒に働き、日本社会から隔離された状態で日本を外国と比較できる立場にいた。そのような立場から見ると、平均的日本人は、物事の理解力が高く、真面目で熱心、責任感がある。周りに気遣いをし、マナーが良く、緻密で完璧主義なので、仕事を安心して任せることができる。先進欧米諸国の教養人と比較しても真に優秀である。

明快な仕組みの中で、各人は与えられた道を効率よくまい進すればよい。努力はしただろうが、大きなリスクを取って道を自ら切り開く必要はなかった。尋常小学校、中学、師範学校、士官学校の人材養成ルートは、まさにそのような目的のものであったと思われる。そこでは各人の個性は育たず、画一的な優等生が育った。

戦後、社会の目標は民主主義の導入と経済発展というもの変わった。しかし、養成された人物像は、戦前と同じく、指示されたことを忠実に行うことに長けた個性のない均質な優等生だった。戦後も中央集権体制が維持され、その社会理念と、大量生産・大量消費社会が必要とする人物像とが一致したことに起因していると思う。

そして育て上げられた画一的な優等生、すなわち平均的な日本人は、前例を踏襲したり、

決められたことを実行することには極めて能力を発揮し、戦後の日本を大発展させた。だが、新しいことにチャレンジしたり、自ら新しいことを発案することは、甚だ不得意で、横並びばかりを考える。

チャレンジ精神を育む教育手法

しかし、今や日本経済は欧米に追い付き、社会全体も個人も、自らが新しい価値を見出し、新しい目標を創らなければ発展がない時代になった。社会の変化に答えられなければ、個人も結局は満足感や幸福感が得られない。独創性を尊び、チャレンジする積極性を育む教育が望まれる所以である。

ところが、識者が声高に教育改革を叫んでも、日本の教育はもっぱら「知識」偏重で、少しも改善されない。それは、一流大学を卒業しなければ一流企業に就職できないという厳しい現実があるからだと思う。しかし、海外で教育を受けた活発な帰国子女を見ると、個性を生かし、チャレンジ心の旺盛な人間を培う具体的な手法を初・中等教育に取り入れさえすれば、彼らと同様に独創的な人材を育てることが日本でも可能なことが想像できる。

欧米やシンガポールなどの学校は、先生の講義を聴く場ではなく、討議し、皆と遊ぶ場である。幼い時から討議することにより、自ら考える力や、他人を知り、

多様性を受け入れる心を養うのである。また、遊びを通じて社会性や積極性を身に付ける。多くの時間を工作などに費やすのは、創造力を養うためだと思う。さらに、体育の授業や運動会は、軍隊式の規律を教えるのではなく、自発的にスポーツを楽しむ機会を与える場なのである。

学歴社会が続く限り、いくら崇高な理想があっても、受験に有利な教育を望む父母の現実的な願いには抗しきれない。

文科省が作成する各学校で教育課程を編成する際の基準である「学習指導要領」は、知識、思考力、人間性の各分野のバランスある教育を目指しており、非の打ちどころがない。しかし、現実の学校教育では、創造性や積極性の分野でその理想通りの成果が得られていない。現在の目標中心の指導要領を、これらを育むため海外で効果を上げていている具体的手法を中心としたものにとり替えてしまうほどの蛮勇を奮わなければ、理想の目標には近づけないだろう。頑張れ、文科省！



文科省は今こそ蛮勇を奮うべきだ！



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒業。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電氣通信の自由化(98年)の担当。国際電気通信連合(ITU)事務局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。